



and more...

スポーツを核とした甲子園エリア活性化推進協議会



「日常の暮らしにスポーツ・レジャーを取り入れた健康で豊かなライフスタイル」を「甲子園スタイル」として提案することで、甲子園エリアを、「訪れたい」、「暮らしたい」まちにすることを目指しています。

Instagram



@koshien.style

HP



https://koshien-style.com

甲子園 × スポーツ エンジョイン

2026 spring



beillevaire 西宮 藤原のどか選手

エンジン

球音が鳴り響くその前から、
甲子園はさまざまなスポーツと共にあった。
歴史をたどれば、ゴルフ、テニス、野球、アメフト、サッカー、
海水浴場やプール、競馬場もあった。

アスリートたちが挑む姿、
それを見守るまなざし、重なる熱い応援。
このまち・甲子園は
スポーツを通じて“縁”と“人”を結び、
幾多の喜びや感動を生み出してきた。

だから
いまも、むかしも、そしてこれからも
甲子園は、スポーツの聖地だ。



特集

“スポーツ”で甲子園にエンジンをかける

P3 beillevaire 西宮 藤原のどか

P5 爪のコンディショニングサロンWelina 西村静香

P7 KOSHUEN OUTFIELD BREWERY 高木康之



特集 “スポーツ”で甲子園にエンジンをかける

01

interview

西宮から、なでしこへ。
甲子園で「次」の夢を耕す、
藤原のどかという生き方



beillevaire西宮

藤原のどか

阪神甲子園球場の熱狂がすぐそばにありながら、少し歩けば穏やかな潮風が吹き抜ける西宮・鳴尾浜。この街を拠点に、なでしこリーグ参入を目指して走り続けている女子サッカークラブがある。「beillevaire西宮 (バイユヴェール西宮)」だ。

フランス発の高級フロマジューリー (チーズ・バター専門店) のブランドを背負い、ピッチの上で、そして地域の中で、彼女たちは「食」と「スポーツ」を掛け合わせた新しいクラブ文化を築こうとしている。その中心にいるのが、藤原のどか選手である。

日本女子サッカー最高峰のWEリーグ「セレッソ大阪ヤンマーレディース」の主力として、文字通り一筋に、トップリーグの最前線で戦い続けてきた。しかし昨シーズン、セレッソを退団する際、彼女の心には「引退」の二文字が浮かんでいたという。

頂点を目指してまっすぐ走り続けてきたキャリアの先に、一体何があるのか。

その問いに対するひとつの答えが、beillevaire西宮との出会いだった。

「ちょうど次のことを考えていた時に、ご縁でお話をいただいて。若い選手が多くて、この子たちの将来のために自分の経験を活かせるんじゃないかと思ったんです」

かつては「自分が結果を出すこと」に全力を注いできた彼女が、いま見つめているのは「次世代の道」だ。beillevaire西宮への加入は、サッカーを通じて街を耕す新しい人生のキックオフでもあった。



藤原選手の日常は、練習だけで完結することはない。彼女は運営母体である株式会社ティーケーシンの社員として、広報、SNS運営、スカウト、さらには予算管理や西宮のデザイナー“GOATABLE”との新ユニフォーム制作まで、多岐にわたる業務をこなしている。競技と仕事、二つの軸を持つデュアルキャリア。それは単なる二足のわらじではなく、確かな手応えを伴っている。

「2025シーズン中にInstagramのフォロワー1,000人突破という目標を達成できた時は、選手として結果を出すのとはまた違う、新しい喜びがありました」

甲子園という街には、圧倒的な野球文化が根付いている。藤原選手はその文化と並走しながら、新しいスポーツの輪を広げようとしている。

「野球という素晴らしい文化がある街だからこそ、そこにサッカーという選択肢も加えて、スポーツの輪をもっと広げていきたい。競技の枠を超えて、トップ選手同士の対談なんか実現したら面白いですね」

現在、地域スポーツは部活動の地域移行など転換期を迎えている。チームが取り組む「甲子園キッズフェスタ」や「甲子園スタイルマルチスポーツイベント」は、その「新しい受け皿」としての役割を担い始めている。

「子どもたちがスポーツの面白さに触れる機会を増やしたい。サッカーでも何でも、夢中になれるものとの出会いを増やしていけたらと思っています」

チームは今、「3年以内のなでしこリーグ昇格」という明確な目標に向かっていく。今季はまず関西1部リーグへの昇格を果たすべく、地域一丸となって戦っている。

藤原選手が蹴るボールは、単なる得点を狙うためだけのものではない。子どもたちの憧れとなり、街の誇りとなり、そして多様な働き方を体現する一人の女性として、キックオフの笛は、もう鳴り響いている。西宮のピッチから、新しいスポーツの文化が、静かに、しかし確実に芽吹き始めている。

information



beillevaire西宮 藤原のどか

◎スポーツとの関わり
サッカーを通じて、アスリートの新しい生き方を示す人・
次の世代の道を拓く人

◎SNS
<https://www.instagram.com/bvnishinomiya/>



02
interview

爪から、競技を支える人——
自分で進む力を信じて



爪のコンディショニングサロン Welina
西村静香

躊躇なく、思い切り踏み込める感覚。打つ、投げる、掴む。一瞬の動作で指先へ伝わる衝撃。身体のほんの一部にすぎない部位。けれど、その部位の違和感は、アスリートにとって、想像以上に大きい。爪が割れる、欠ける、痛む。わずかな不調が、集中を削ぎ、動きを鈍らせる。

爪のケアは、一般的にはおしゃれの一部として捉えられがちだ。一方で、パフォーマンスを左右する「力を受け止め、伝えるために、実は大きな役割を果たしている」と、爪のコンディショニングサロン『Welina (ウェリナ)』オーナーの西村さんは話す。

アスリートにとって、爪は理想のパフォーマンスを支える重要な存在だ。

その爪のケアを行うのが「アスリートネイル」だ。

その視点の背景には、自身の経験がある。高校3年生まで続けたバレーボール。深爪や割れた爪、魚の目の痛みを抱えながら、テーピングでごまかしてプレーしていた。「当時は、相談できる場所がなかった」。その記憶が、今、アスリートへの寄り添う姿勢として現れている。

ネイリストとして活動する中で出会った「アスリートネイル」という分野は、過去の自分と重なった。競技特有の負荷、回復までの時間、試合や遠征スケジュール。爪だけでなく、競技とアスリートの心と体を想像しながら向き合う。日々の対話の中で、少しずつ学び、実感として掴んできたこと。それもまた、爪のケアの一部だと、西村さん自身がたどりついた答えだ。

特に印象に残ったのは、西村さんの関わり方だ。「こうした方がいい」と先に答えを出すことはほとんどない。代わりに、「どうプレーしたいのか」「何が一番不安なのか」を丁寧に聞き取る。

爪が回復しても、不安だけが残る選手もいる。写真を送って確認してくる人もいる。医学的には問題がなくても、気持ちは揺れるもの。西村さんは、その不安を軽く扱わない。安心して競技に臨めるよう、言葉を選び、その場で自身で対処できる方法をアドバイスする。自分がいなくても前に進めるように。その積み重ねが、メンタルの支えになり、その距離感が、長く続く信頼関係を築いている。徹底的に寄り添う姿勢。その根底にあるのは、「答えは本人の中にあって、私はそれを引き出して、叶えるサポートをする存在」という信念だ。

「ネイルは女性のもの、という思い込みをなくし、男性アスリートや子どもが、自然に爪の相談をできる場所でありたい」と西村さん。捻挫や体の違和感を相談するのと同じ感覚で、爪のケアも当たり前前の選択肢の一つに入る。トレーナーや指導者、選手たちが連携し、その流れの中に爪のケアも自然にある世界。そんなスポーツコンディショニングの世界を思い描いている。

「トラブルが起きてからではなく、起きる前に」。予防としてのケアが当たり前になれば、痛みを我慢することなく、競技を続けられる人はきっと増える。その積み重ねが、アスリートの未来を支えると信じている。

西村さんの穏やかで優しいまなざしの中には、アスリートが自分で進む力を信じて支えるという、強い意志を感じた。



information



爪のコンディショニングサロン Welina
西村静香

◎スポーツとの関わり
スポーツ専門爪のメンテナンス
アスリートに寄り添うパートナー

◎SNS
https://www.instagram.com/welina_nail/





KOSHIEN OUTFIELD BREWERY

高木康之

03
interview

日常と非日常のあいだで、
クラフトビールと人とスポーツが
つながる未来@甲子園

ガラス越しに醸造タンクが並び、コンクリートの空間に小さなカウンター。その場には、不思議と人の会話が自然に立ち上がってくる空気がある。ビアバーとして2025年4月に開店し、6月に醸造免許を取得して醸造を始めた「KOSHIEN OUTFIELD BREWERY (甲子園アウトフィールドブリュワリー)」だ。

阪神甲子園球場という圧倒的なアイコンのすぐそばにありながら、あえて“アウトフィールド＝外野”を名乗る。この場所がその一部であり、同時に「外野」であることを選んでいるように映る。街とスポーツを見つめる拠点として少しずつ街に定着しつつある。

立ち上げたのは高木康之さん。広告代理店でマーケティングに携わり、独立後に偶然出会った小規模醸造所のクラフトビールに衝撃を受けたという。

「味はもちろんですが、それ以上に、こんな小さな場所でビールが生まれるという事実に関心を抱かれました」

コロナ禍で一度は夢を手放しかけたが、収束とともに想いが再燃。修行を重ね、自分の醸造所を持つ決意に至った。前職では、多くの人とチームを組み、役割を分担しながら「つくる」仕事をしてきた。ただ、それはチームプレイの中にあり、自分がつくったという実感は感じにくかった。

原料に触れ、手を動かし、時間を待つ。ビールづくりでは、その一つひとつが自分の行為として積み重なっていく。

カウンターに立ち、注いだビールに返ってくる言葉や表情。「これ、おいしい」。確かな手ごたえを感じる瞬間だ。自社醸造の第一弾につけた名前は「PLAY BALL」。甲子園という場所と、新しい挑戦の始まりの合図を重ねた。KOSHIEN OUTFIELD BREWERYが大切にしているのは、場の温度である。「近所の人や、ちょっと寄れる場所に」。その思いは、通りがかりの人や観戦帰りの客へと広がり、ビールを通して人が自然に交わる空気を作っている。

いま都市の中で、クラフトビール醸造所は「飲むための場所」から、人が自然につながる場へと役割を広げつつある。

土地の水や空気、歴史とともに育ってきたクラフトビール文化の積み重ねは、自分に向き合う姿勢とも重なる。身体を鍛え、感覚を磨き、試合に臨むスポーツのプロセスとも重なって見える。その姿勢に共感する人が集まり、クラフトビールのある場には、つくることや身体を動かすことを楽しむ人たちが、立場を越えて自然に交わっていく。



そんな発想から生まれたのが「ビアラン」という企画だ。

一緒に走り、同じビールを飲む。すると不思議と距離が縮まり、会話が盛り上がる人気の企画だ。大きな熱狂もある。でも、そこにいつもある日常がある。

地域に根ざし、人の営みとともに続いていく文化として、クラフトビールは街のスポーツの精神とも、静かに呼応する。

甲子園という街で、クラフトビールを起点に、スポーツとの新しい関係性が育っていく。その未来を、この場所では自然と思いつくことができる。



information



KOSHIEN OUTFIELD BREWERY
高木康之

◎スポーツとの関わり
スポーツに関わる人のつながりの拠点として在り続ける

◎SNS
<https://www.instagram.com/koshienoutfield>



甲子園・西宮には、
ずっと前からこのまちに根付いてきたスポーツや、
いま、静かに芽吹こうとしている取り組みが、
きっとまだまだたくさんあります。
それらを、ひとつひとつ見つけて集めて、たいせつにしていくこと。
その積み重ねが、このまちを動かし、
次のにぎわいを生み出す原動力になると、私たちは考えています。

これからも、甲子園・西宮に息づく
熱いスポーツへの想いを、丁寧にすくい上げていきたい。

「こんなのもあるよ」

「実は、ずっと続けてきたんです」

そんな声がありましたら、どうか教えてください。

あなたの想いが、このまちの次の物語になります。

編集後記

2025年9月より月1回、ららぽーと甲子園2階にある西宮市情報発信スペース「クリエートにしのみや」に甲子園で様々な立場でスポーツに関わる方が集まり、この冊子を制作してまいりました。時には走り方の情報交換、時には次の試合の会場についてなど競技の枠を超えて、また、スポーツをするひと・支えるお仕事・場をつくる人、それぞれの想いを交わらせながら熱く語り合う場となっていきました。



まだまだ私たちは始まったばかりです。
ぜひあなたもこの仲間のひとりになってください。一緒に甲子園で”スポーツの未来”をデザインしていきませんか？

Instagram

西宮市情報発信スペース「クリエートにしのみや」



@create2438_wbhh

エン○ジン編集部

企画：株式会社ウェルビーイング阪急阪神

取材・撮影：藤本亜希子

デザイン：オオタユウコ

編集：北内真子、曲馬秀樹、南茂英樹、藤原のどか、山本柱充

甲子園×スポーツ・オープン編集会議にご参加いただいたみなさま

撮影協力：阪神甲子園球場

協力：一般社団法人 SWH Futsal Club

NPO 法人えびすバスケットボールクラブ

株式会社 EPIC DREAM

株式会社ディーケーシィン (beillevaire 西宮)

日本たばこ産業株式会社 (大阪マーヴェラス)

(五十音順)

発行：2026年3月